

タイトル	醜形懸念とメディア情報の影響の関連についての生涯発達の検討
著者	田中，勝則； TANAKA, Masanori
引用	北海学園大学学園論集(172)： 71-80
発行日	2017-06-25

醜形懸念とメディア情報の影響の 関連についての生涯発達の検討

田 中 勝 則

1. 問題と目的

醜形懸念は容姿についての欠陥への過剰な心配や強いとらわれ、過度の確認行動や容姿についての欠陥をカムフラージュするための行動、社会的な場面からの回避や安全を求める行動によって特徴づけられる (Littleton, Axsom, & Pury, 2005) ボディイメージ障害の一つである。従来、醜形恐怖症 (Body Dysmorphic Disorder : BDD) の臨床像として取り扱われてきた概念だが、近年、BDD 臨床群に限らず、このような状態像を示す一群が存在することが報告されており (e.g. Altamura et al., 2001 ; Bartsch, 2007), 醜形懸念は BDD 臨床群と非臨床群との間で質的に異なるものではなく、量的な連続性を有する概念と考えられている (Lambrow, Veale, & Wilson, 2012)。先行研究において、醜形懸念の強い成人女性が不健康なダイエット行動を行うこと (Littleton & Breitenkopf, 2008) や、醜形懸念の強い大学生は他者からの否定的評価に対する恐れが高いこと (田中・田山, 2013) が報告されており、強い醜形懸念は心身の不調に関連することが示されている。したがって、醜形懸念の軽減や予防を目的とした関連要因の検討が必要である。

これまでに醜形懸念に関連する心理学的要因として、完全主義認知 (田中・田山, 2011) やアレキシサイミア (田中・田山・有村, 2013) が取り上げられ、醜形懸念との関連についての検討が行われてきた。一方、これまで主に体重や体型に関連するボディイメージ障害を説明する要因の一つとして、メディア情報の影響の存在が指摘されている (Heinberg, Thompson, & Stormer, 1995)。主に西洋諸国や先進国を中心に、メディアを通じて痩身であることを美とする情報が発信され続けその価値観が社会に広がったこと、加えて、こうした価値観を内在化していった若年女性がボディイメージ障害を引き起こす危険が高いことが言及されている (Thompson et al., 1999)。

ボディイメージ障害に関連するメディア情報の影響をアセスメントするためのツールとして、Heinberg et al. (1995) は Sociocultural Attitudes Towards Appearance Scale (SATAQ) を開発している。その後、SATAQ は改訂が行われ、メディア情報の影響を「情報の重要性」、「メディアによるプレッシャー」、「痩せ理想の内在化」、「スポーツ選手理想の内在化」の 4 因子で測定する SATAQ-3 (Thompson et al., 2004) が幅広く

活用されている。「情報の重要性」因子は、容姿を改善するために美や痩身に関してメディアから得られる情報をどの程度重視しているかを反映している。「メディアによるプレッシャー」因子は、痩身に関するメディアのプレッシャーをどの程度感じているかを反映している。「痩せ理想の内在化」因子は、メディアで目にする芸能人やモデルのような体形やスタイルを理想としてどの程度内在化しているかを反映している。「スポーツ選手理想の内在化」因子は、スポーツ選手のような筋肉質の体形やスタイルを理想としてどの程度内在化しているかを反映している。我が国で女子大学生（短大生含む）を対象とした調査の結果、これらの因子はいずれも痩身願望やダイエット傾向、自分の容姿を他者と比較する傾向と正の関連を有することが確認されている（山宮・島井，2012）。

体重や体型に限らず、容姿の美醜に関する情報がメディアで盛んに発信されていることを踏まえれば、ボディイメージ障害である醜形懸念の増悪要因として、メディア情報の影響が存在することが考えられる。しかし、この点からの検討は未だ行われていない。醜形懸念に関連するメディア情報の影響が明らかとなることを通じ、新たに醜形懸念を軽減、予防するためのアプローチに寄与する知見が得られる可能性がある。

また、醜形懸念については20代から30代にかけて高い値を示し、40代以降は低下していく（Tanaka, Tayama, & Arimura, 2012）。一方、中年期以降の発達段階において、加齢に伴う容姿の衰えをカバーすることを目的とした外科的処置を希望する者の中に醜形懸念

を訴える一群が存在する（Koblenzer, 1997）。したがって、これまで主に青年期における大学生を中心に行われてきた醜形懸念の研究について、その研究対象者の年齢層を拡大し、生涯発達の観点から検討を行うことは有益な知見をもたらす可能性がある。

以上を踏まえ、本研究では醜形懸念とメディア情報の影響の関連について、生涯発達の視点から検討を行うことを目的とする。

2. 方 法

2-1. 調査対象と調査手続

2012年10月にインターネット調査会社（株式会社マクロミル）を通じ、webによる全国調査を実施した。調査対象は同社に登録されたりサーチ専用モニタ約110万名（調査実施時点）であり、15歳から69歳までの男女1440名が回答を行った。なお、調査協力者の男女比および年代構成（10代-60代）が同等になるように統制を行った。また、同一回答者の複数回答禁止や回答者ごとに質問票単位での提示を無作為化することを通じて、データの良質化を図った。調査に協力したモニタに対しては、調査終了後に調査会社を通じて100円相当のポイントが還元された。調査に参加したモニタの平均年齢は、男女ともに40歳（ $SD=16$ ）であり、各年代の平均年齢は10代で18歳（ $SD=1$ ）、20代で25歳（ $SD=3$ ）、30代で35歳（ $SD=3$ ）、40代で44歳（ $SD=3$ ）、50代で54歳（ $SD=3$ ）、60代で63歳（ $SD=3$ ）であった。調査で得られた回答は匿名処理が施された上でデータ入力され、調査会社から筆者へと納品された。

2-2. 調査内容

性別および年齢については、調査協力者が調査会社にモニタとして登録する際に申告した情報が用いられた。加えて、web フォームに加工された次の質問紙への回答を求めた。

1) 日本語版 Body Image Concern Inventory (田中・有村・田山, 2011; Tanaka et al., 2015; 以下, J-BICI とする)

醜形懸念を測定するために用いた。J-BICI は全 19 項目で構成される自記式の質問紙であり、醜形懸念を包括的に測定することが可能である(項目例:「自分の容姿は極端に魅力に欠けるところがあると思う」)。BICI の原版は Littleton et al (2005) によって作成された。その後、田中ら (2011) によって日本語版の作成が行われており、J-BICI は十分な信頼性と妥当性を有することが確認されている。

調査協力者は 1「まったくない」-5「いつもそうだ」の 5 件法で回答を行った。得点が高いほど醜形懸念が強いことを示す。本研究では Tanaka et al. (2015) の指摘に倣い、J-BICI の合計得点を醜形懸念の重症度の指標として用いた。

2) 日本語短縮版 Sociocultural Attitudes Towards Appearance Questionnaire-3 (山宮・島井, 2012; 以下, SATAQ-3 JS とする)

メディア情報の影響を測定するために用いた。オリジナル版である SATAQ-3 (Thompson et al., 2004) は 30 項目で構成されているが、山宮・島井 (2012) によって作成された SATAQ-3 JS は簡便性向上のために 12 項目に短縮されている。この SATAQ-3 JS においても信頼性と妥当性が確認されており、オ

リジナル版の SATAQ-3 同様、「情報の重要性 (項目例:「雑誌に出ている写真は流行のファッションや“美”に関する重要な情報源である」)」、「メディアによるプレッシャー (項目例:「テレビや雑誌を見ていると、痩せなければいけないというプレッシャーを感じる」)」、「痩せ理想の内在化 (項目例:「映画に出ている芸能人のような体形・スタイルになりたい」)」、「スポーツ選手理想の内在化 (項目例:「自分の体型・スタイルをスポーツ選手の体型・スタイルと比べる」)」の 4 因子を測定することが可能である。

調査協力者は 1「まったく同意しない」-5「かなり同意する」の 5 件法で回答を行った。各下位因子得点が高いほど、メディア情報の影響を強く受けていることを示す。

2-3. 統計解析

調査に回答した 1440 名全てのデータを解析に用いた。予備分析として、本研究で測定される概念の内的整合性を検証するために、J-BICI の合計得点、および、SATAQ-3 JS の下位因子得点について、Cronbach の α 係数を年代別に算出した。次に、年代別 (10 代-60 代) にこれらの変数間の関連を検討するため、Pearson の積率相関係数を求めた。以上の結果を踏まえ、メディア情報の影響が醜形懸念とどの程度関連するかを検討するために、J-BICI の合計得点を基準変数、SATAQ-3 JS の下位因子得点を説明変数とする重回帰分析 (強制投入法) を行った。重回帰分析における説明変数間の多重共線性の検討には VIF 値を参照し、 $VIF \leq 10$ である場合には多重共線性の問題が発生していないものと判断

した。各検定における有意水準は5%とした。統計解析にはSPSS Statistics version 19.0を用いた。

2-4. 倫理的配慮

調査参加に先立ち、調査協力への意向を示したモニタに対しては、web画面上で調査研究の趣旨や匿名性の担保について提示を行った。これらに自らの自由意思で同意した者のみが調査へ参加することができるよう、配慮を行った。

3. 結 果

3-1. 内的整合性の検討

予備分析として、J-BICIの合計得点、および、SATAQ-3 JSの下位因子得点におけるCronbachの α 係数を求めた。その結果、 $\alpha = .81-.95$ の値が得られたことから、本研究におけるこれらの変数が十分な内的整合性を有していることが確認された。この結果に基づき、以降の分析を継続して行った。

3-2. 醜形懸念とメディア情報の影響との相関の年代別検討

年代別(10代-60代)にJ-BICI合計得点とSATAQ-3 JSの下位因子得点間の積率相関係数を算出した。全ての年代において、これらの変数間で有意な正の相関を認めた(Table 1)。

10代では、J-BICI合計得点とSATAQ-3 JSの全ての下位因子得点との間で有意な正の相関が確認された($r = .22-.54, p < .01$)。SATAQ-3 JSの全ての下位因子得点間においても、有意な正の相関が確認された($r =$

$.24-.67, p < .01$)。

20代では、J-BICI合計得点とSATAQ-3 JSの全ての下位因子得点との間で有意な正の相関が認められた($r = .17-.54, p < .01$)。更に、SATAQ-3 JSの全ての下位因子得点間においても、有意な正の相関が認められた($r = .23-.72, p < .01$)。

30代では、J-BICI合計得点とSATAQ-3 JSの全ての下位因子得点間で有意な正の相関を示した($r = .21-.48, p < .01$)。同様に、SATAQ-3 JSの全ての下位因子得点間においても、有意な正の相関が認められた($r = .23-.62, p < .01$)。

40代では、J-BICI合計得点とSATAQ-3 JSの全ての下位因子得点との間で有意な正の相関が確認された($r = .22-.56, p < .01$)。SATAQ-3 JSの全ての下位因子得点間でも、有意な正の相関が確認された($r = .29-.65, p < .01$)。

50代では、J-BICI合計得点とSATAQ-3 JSの全ての下位因子得点との間で有意な正の相関を示した($r = .25-.44, p < .01$)。同様に、SATAQ-3 JSの全ての下位因子得点間においても、有意な正の相関を示した($r = .32-.58, p < .01$)。

60代では、J-BICI合計得点とSATAQ-3 JSの全ての下位因子得点との間で有意な正の相関が認められた($r = .26-.43, p < .01$)。同様に、SATAQ-3 JSの全ての下位因子得点間においても、有意な正の相関が認められた($r = .41-.62, p < .01$)。

Table 1 J-BICI 合計得点および SATAQ-3 JS 下位因子得点間の積率相関係数

10 代 (N=240 ; men = 120, women = 120)				
	情報の重要性	メディアによるプレッシャー	痩せ理想の内在化	スポーツ選手理想の内在化
J-BICI	.47	.51	.54	.22
情報の重要性		.54	.67	.33
メディアによるプレッシャー			.62	.24
痩せ理想の内在化				.33
20 代 (N=240 ; men = 120, women = 120)				
	情報の重要性	メディアによるプレッシャー	痩せ理想の内在化	スポーツ選手理想の内在化
J-BICI	.49	.54	.53	.17
情報の重要性		.59	.72	.26
メディアによるプレッシャー			.64	.23
痩せ理想の内在化				.30
30 代 (N=240 ; men = 120, women = 120)				
	情報の重要性	メディアによるプレッシャー	痩せ理想の内在化	スポーツ選手理想の内在化
J-BICI	.36	.48	.44	.21
情報の重要性		.38	.62	.26
メディアによるプレッシャー			.54	.23
痩せ理想の内在化				.37
40 代 (N=240 ; men = 120, women = 120)				
	情報の重要性	メディアによるプレッシャー	痩せ理想の内在化	スポーツ選手理想の内在化
J-BICI	.48	.53	.56	.22
情報の重要性		.52	.65	.29
メディアによるプレッシャー			.57	.36
痩せ理想の内在化				.39
50 代 (N=240 ; men = 120, women = 120)				
	情報の重要性	メディアによるプレッシャー	痩せ理想の内在化	スポーツ選手理想の内在化
J-BICI	.32	.40	.44	.25
情報の重要性		.47	.58	.32
メディアによるプレッシャー			.53	.35
痩せ理想の内在化				.42
60 代 (N=240 ; men = 120, women = 120)				
	情報の重要性	メディアによるプレッシャー	痩せ理想の内在化	スポーツ選手理想の内在化
J-BICI	.43	.41	.42	.26
情報の重要性		.47	.62	.41
メディアによるプレッシャー			.57	.41
痩せ理想の内在化				.50

* 表中の全ての相関係数の値は 1%水準で有意

Table 2 J-BICI を基準変数, メディア情報への感受性・内在化傾向を説明変数とした重回帰分析

	醜形懸念 (J-BICI 合計得点)					
	10 代		20 代		30 代	
	β	t	β	t	β	t
SATAQ-3 JS						
情報の重要性	.13	1.80	.14	1.77	.11	1.56
メディアによるプレッシャー	.26	3.85***	.32	4.56***	.32	4.92***
痩せ理想の内在化	.28	3.56***	.22	2.73**	.19	2.33*
スポーツ選手理想の内在化	.02	.36	.00	-.01	.04	.60
	R^2	F	R^2	F	R^2	F
	.35	31.66***	.36	32.80***	.28	23.02***

	醜形懸念 (J-BICI 合計得点)					
	40 代		50 代		60 代	
	β	t	β	t	β	t
SATAQ-3 JS						
情報の重要性	.14	2.00*	.04	.53	.23	3.15**
メディアによるプレッシャー	.28	4.35***	.21	3.06**	.22	3.05**
痩せ理想の内在化	.33	4.47***	.29	3.75***	.15	1.84
スポーツ選手理想の内在化	-.05	-.86	.04	.67	.00	.07
	R^2	F	R^2	F	R^2	F
	.39	37.19***	.24	18.18***	.25	19.66***

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

3-3. 醜形懸念とメディア情報の影響との関連の年代別検討

J-BICI の合計得点を基準変数, SATAQ-3 JS の下位因子得点を説明変数とする重回帰分析 (強制投入法) を行った (Table 2)。なお, 相関分析の結果, SATAQ-3 JS の下位因子間において相関が確認されたため, 分析に先立ち多重共線性の検討を行った。その結果, 全ての検定において VIF=1.1-2.5 の範囲の値を示したことから, 本分析では多重共線性の問題は発生していないと判断し, 以降の分析を継続した。

10 代では「メディアによるプレッシャー」($\beta = .26, p < .001$) と「痩せ理想の内在化」($\beta = .28, p < .001$) が J-BICI の合計得点と有意な正の関連を示した。「情報の重要性」

($\beta = .13, p = .074$), および, 「スポーツ選手理想の内在化」($\beta = .02, p = .719$) は J-BICI の合計得点との間で有意な関連を認めなかった ($R^2 = .35, p < .001$)。

20 代では「メディアによるプレッシャー」($\beta = .32, p < .001$) と「痩せ理想の内在化」($\beta = .22, p < .01$) が J-BICI の合計得点と有意な正の関連を認めた。「情報の重要性」($\beta = .14, p = .078$), および, 「スポーツ選手理想の内在化」($\beta = .00, p = .989$) は J-BICI の合計得点との間で有意な関連が確認されなかった ($R^2 = .36, p < .001$)。

30 代では「メディアによるプレッシャー」($\beta = .32, p < .001$) と「痩せ理想の内在化」($\beta = .19, p < .05$) が J-BICI の合計得点と有意な正の関連を示した。「情報の重要性」

($\beta = .11$, $p = .119$), および, 「スポーツ選手理想の内在化」($\beta = .04$, $p = .595$) は J-BICI の合計得点との間で有意な関連を認めなかった ($R^2 = .28$, $p < .001$)。

40 代では「情報の重要性」($\beta = .14$, $p < .05$), 「メディアによるプレッシャー」($\beta = .28$, $p < .001$), および, 「痩せ理想の内在化」($\beta = .33$, $p < .001$) が J-BICI の合計得点と有意な正の関連を示した。「スポーツ選手理想の内在化」($\beta = -.05$, $p = .393$) のみ, J-BICI の合計得点との間で有意な関連を認めなかった ($R^2 = .39$, $p < .001$)。

50 代では「メディアによるプレッシャー」($\beta = .21$, $p < .01$) と「痩せ理想の内在化」($\beta = .29$, $p < .001$) が J-BICI の合計得点と有意な正の関連を示した。「情報の重要性」($\beta = .04$, $p = .597$), および, 「スポーツ選手理想の内在化」($\beta = .04$, $p = .666$) は J-BICI の合計得点との間で有意な関連を認めなかった ($R^2 = .24$, $p < .001$)。

60 代では「情報の重要性」($\beta = .23$, $p < .01$), 「メディアによるプレッシャー」($\beta = .22$, $p < .01$) が J-BICI の合計得点と有意な正の関連を示した。「痩せ理想の内在化」($\beta = .15$, $p = .068$), および, 「スポーツ選手理想の内在化」($\beta = .00$, $p = .948$) は J-BICI の合計得点との間で有意な関連を認めなかった ($R^2 = .25$, $p < .001$)。

以上の結果より, 「情報の重要性」因子は, 40 代と 60 代においてのみ, 醜形懸念との間で正の関連を示すことが確認された。また, 全ての年代において「メディアによるプレッシャー」因子が醜形懸念との間で正の関連を有することが明らかとなった。更に, 60 代を

除く全ての年代において, 「痩せ理想の内在化」因子が醜形懸念との間で正の関連を示すことも確認された。「スポーツ選手理想の内在化」はどの年代においても, 醜形懸念との間で有意な関連を認めなかった。

4. 考 察

本研究の目的は, 醜形懸念とメディア情報の影響との関連について, 生涯発達の視点から検討を行うことであった。

4-1. 醜形懸念とメディア情報の影響との関連

相関分析の結果, 醜形懸念とメディア情報の影響の全ての下位因子との間に有意な正の相関が認められた。醜形懸念と「情報の重要性」, 「メディアによるプレッシャー」, 「痩せ理想の内在化」の各下位因子との間では中程度の正の相関が確認された。一方, 醜形懸念と「スポーツ選手理想の内在化」因子との間では弱い正の相関が認められた。醜形懸念とメディア情報の影響との間のこのような相関関係については, 年代間で一貫した傾向にあることが窺われた。

相関分析の結果を踏まえ, 年代別に J-BICI の合計得点を基準変数, SATAQ-3 JS の下位因子得点を説明変数とする重回帰分析を行った。

メディア情報の影響の下位因子のうち, 「情報の重要性」因子は 40 代, および, 60 代の調査対象者においてのみ, 醜形懸念と正の関連があることが確認された。したがって, 同因子は中年期以降に問題となる醜形懸念の増悪を特異的に予測する可能性を有していること

が示唆される。他の世代と比して、これらの年代ではメディアが発する美や痩身に関する情報に対して選択的注意が生じている可能性が伺われる。今後の更なる検討が必要である。

「メディアによるプレッシャー」因子、および、「痩せ理想の内在化」因子はほぼ全ての年代において、醜形懸念との間で正の関連があることが明らかとなった。これらの因子は年代を問わず、醜形懸念の増悪を予測することが示唆される。また、これらの2因子は痩身に関するため、特に体型や体格、体重等に関連する醜形懸念と関連している可能性がある。このことを踏まえ、醜形懸念の増悪予防を目的とした「メディアによるプレッシャー」、および、「痩せ理想の内在化」への介入方略の検討が今後の課題としてあげられる。

「スポーツ選手理想の内在化」因子は、いずれの年代においても醜形懸念との間で有意な関連を認めなかった。J-BICIでは醜形懸念を包括的に測定することが可能であるものの、スポーツ選手や競技者に特有の醜形懸念である筋肉醜形症 (muscle dysphoria) という状態像が存在することが指摘されている (Pope et al., 1997)。筋肉醜形症を独自に測定するためのアセスメントツール (e.g. Muscle Dysphoria Disorder Inventory; Hildebrandt, Langenbucher, & Schlundt et al., 2004) が海外では存在するが、本邦においては同様のツールが存在しない。新たなツールの開発、および、「スポーツ選手理想の内在化」因子と筋肉醜形症のような特異的な醜形懸念の関連について、今後の検討が望まれる。また、実

際にスポーツ競技者を対象とした検討も必要であろう。

4-2. 本研究における限界と今後の課題

本研究における限界と今後の課題は次の通りである。

まず、本研究は横断型の調査研究であり、醜形懸念とメディア情報の影響の関連の生涯発達的变化について因果関係を直接的に言及することはできない。縦断型の調査研究や実験的検討を通じ、両者の関連について更なる検討が必要である。

また、本研究ではweb調査を活用し、比較的大規模な対象から得られたデータを基に解析を行った。調査対象者はwebを通じて調査会社に自らの意志でモニタ登録を行っている。このことを踏まえると、今回の調査対象者はwebを介したメディアへの親和性や接触頻度が高い群である可能性があり、そのことが今回の結果に影響しているかもしれない。

更に、質問紙調査に関しては紙筆版とweb版の等価性について吟味することが推奨されている (Buchanan, 2003)。J-BICI および SATAQ-3JS のいずれにおいても、この点についての検討はこれまで行われていない。ここまで指摘したweb調査独自の問題を改善した上で、今後、更なる検討を行うことが期待される。

4-3. 結論

本研究では、生涯発達的な視点から醜形懸念に関連するメディア情報の影響について明らかにすることが目的であった。「情報の重

要性」因子は40代および60代において特異的に醜形懸念と関連していた。「メディアによるプレッシャー」因子、および、「痩せ理想の内在化」因子はほぼすべての世代において醜形懸念と正の関連を示した。「スポーツ選手理想の内在化」因子は醜形懸念との関連を認めなかった。

文 献

- Altamura, C., Paluello, M. M., Mundo, E., Medda, S., & Mannu, P. (2001) Clinical and subclinical body dysmorphic disorder. *European Archives of Psychiatry and Clinical Neuroscience*, 251, 105-108.
- Bartsch, D. L. (2007) Prevalence of body dysmorphic disorder symptoms and associated clinical features among Australian university students. *Clinical Psychologist*, 11, 16-23.
- Buchanan, T. (2003) Internet-based questionnaire assessment: Appropriate use in clinical contexts. *Cognitive Behavior Therapy*, 32, 100-109.
- Heinberg, L. J., Thompson, J. K., & Stormer, S. (1995) Development and validation of the Sociocultural Attitudes Towards Appearance Questionnaire. *International Journal of Eating Disorders*, 17, 81-89.
- Hildebrandt, T., Langenbucher, J., & Schlundt, D. G. (2004) Muscularity concerns among men: development of attitudinal and perceptual measures. *Body Image*, 1, 169-181.
- Koblenzer, C. S. (1997) Psychodermatology of women. *Clinics in Dermatology*, 15, 127-141.
- Lambrow, C., Veale, D., & Wilson, G. (2012) Appearance concern comparisons among persons with body dysmorphic disorder and non-clinical controls with and without aesthetic training. *Body Image*, 9, 86-92.
- Littleton, H. L., Axson, D., & Pury, C. L. S. (2005) Development of the body image concern inventory. *Behaviour Research and Therapy*, 43, 229-241.
- Littleton, H. L., & Breitkopf, C. R. (2008) The Body Image Concern Inventory: Validation in a multiethnic sample and initial development of a Spanish language version. *Body Image*, 5, 381-388.
- Pope, Jr., H. G., Gruber, A. J., Choi, P., Olivardia, R., & Phillips, K. A. (1997) Muscle dysmorphia. An under recognized form of body dysmorphic disorder. *Psychosomatics*, 38, 548-557.
- 田中勝則・有村達之・田山 淳 (2011) 日本語版 Body Image Concern Inventory の作成 心身医学, 51, 162-169.
- 田中勝則・田山 淳 (2011) 大学生における身体醜形懸念と完全主義認知の関連 認知療法研究, 4, 140-148.
- Tanaka, M., Tayama, J., & Arimura, T. (2012) Developmental changes of body dysmorphic concern in Japanese population: A cross-sectional web-based survey. *International Journal of Behavioral Medicine*, 19, (Suppl. 1), S14-15.
- 田中勝則・田山 淳 (2013) 高い身体醜形懸念を有する大学生の対人場面における認知の特徴 カウンセリング研究, 46, 189-196.
- 田中勝則・田山 淳・有村達之 (2013) 大学生における身体醜形懸念とアレキシサイミアの関連 心身医学, 53, 334-342.
- Tanaka, M., Tayama, J., Arimura, T. (2015) Factor structure of the Body Image Concern Inventory in a Japanese sample. *Body Image*, 13, 18-21.
- Thompson, J. K., van den Berg, P., Roehrig, M., Guarda, A. S., & Heinberg, L. J. (2004) The sociocultural attitudes towards appearance scale-3 (SATAQ-3): Development and validation. *International Journal of Eating Disorders*, 35, 293-304.
- Thompson, J. K., Heinberg, L. J., Altabe, M., & Tantleff-Dunn, S. (1999) *Exacting Beauty. Theory, Assessment, and Treatment of Body Image Disturbance*. Washington, DC: American Psychological Association.
- 山宮裕子・島井哲志 (2012) 日本版 Sociocultural Attitude Towards Appearance Questionnaire-3 短縮版 (SATAQ-3 JS) の開発と信頼

性・妥当性の検討 心身医学, 52, 54-63.

回大会で発表した内容に加筆修正を加えたものである。

付 記

本研究は, 日本カウンセリング学会第46